



岐阜県新発見考古速報 2025

—令和7年度岐阜県発掘調査報告会 発表資料—



郡上市 国指定史跡 東氏館跡及び篠脇城跡

日時 令和7年10月25日（土） 13:15～15:45

会場 岐阜県図書館 1階 多目的ホール

主催 岐阜県文化財保護センター

共催 岐阜県図書館

日程

12:45～13:15	受付
13:15～13:20	開会挨拶 岐阜県文化財保護センター所長
13:20～14:00	事例発表Ⅰ 高山市： ^{ひやけいせき} 日焼遺跡 岐阜県文化財保護センター 村上 博基
14:05～14:45	事例発表Ⅱ 各務原市： ^{うぬまふるいちばいせき} 鵜沼古市場遺跡C地区 各務原市埋蔵文化財調査センター 三浦 薫平 氏
14:45～15:00	休憩・遺物見学
15:00～15:40	事例発表Ⅲ 郡上市： ^{くにしせき} 国史跡 ^{とうしやかたあとおよ} 東氏館跡及び ^{しのわきじょうあと} 篠脇城跡 郡上市教育委員会社会教育課 今津 和也 氏
15:40～15:45	事務連絡

資料目次

日焼遺跡の調査	1
鵜沼古市場遺跡C地区 発掘調査報告	5
国指定史跡 東氏館跡及び篠脇城跡について	9
令和6年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査実施一覧	13

清流の国ぎふ憲章

～ 豊かな森と清き水 世界に誇れる我が清流の国 ～

「清流の国ぎふ」に生きる私たちは、

知 清流がもたらした自然、歴史、伝統、文化、技を知り学びます

創 ふるさとの宝ものを磨き活かし、新たな創造と発信に努めます

伝 清流の恵みを新たな世代へと守り伝えます

共 ふるさとへの愛着と誇りを胸に、一人ひとりが輝く未来を共に築きます

日焼遺跡の調査

岐阜県文化財保護センター

1 はじめに

当遺跡は、高山市上切町に所在し、高山盆地北西部の三枝山から南に延びる丘陵の尾根及び傾斜地に立地します。当遺跡の眼下には、川上川と高曾洞川^{こそぼらがわ}が流れ、当遺跡周辺の丘陵地や川上川の氾濫の影響の少ない緩傾斜地に縄文時代～中世の遺跡が分布します（図1）。当遺跡の北側には上切寺尾古墳群が所在し、上切寺尾古墳群の南部と当遺跡の北部は重複しています（図5）。

今回の発掘調査は、中部縦貫自動車道高山清見道路事業に先立ち、平成27・28年度に合計1,852㎡を対象に実施しました。発掘調査の結果、縄文時代の煙道付炉穴、竪穴建物、古代の竪穴建物、掘立柱建物、礎石建物などを確認しました。古代の礎石建物では、鏡が埋納されており、礎石建物の周辺で螺髪や多口瓶、鉄鉢などが出土し、礎石建物は寺院としての性格をもっていたと考えられます。

2 調査の成果

（1）礎石建物（SB04）の立地・位置について

今回の調査で確認した礎石建物は、三枝山の山麓に位置します。礎石建物の西側には白山神社が立地し、白山神社と礎石建物は、山麓に並列します。また、礎石建物と白山神社の間の谷は水源があり、「寺洞」という地名であることから、北に延びる谷奥全体が寺に関連する場所として利用されていたと考えられます。閼伽水^{あかみず}（仏様に供える水）の水汲場として、寺域に水源があることは、山寺の必要条件に適合する立地であるということができます。

（2）礎石建物について

①規模・寸法

礎石建物は、桁行5間、梁行3間、真北方向を意識して南面した建物で、測定した柱間の長さから、唐尺（1尺0.298m）を造営尺としていたと考えられます（図3）。須弥壇^{しゅみだん}は身舎^{もや}の中央に配置されます。P08・13は本尊の中央と重なるため、少なくともP13に通し柱はなかったと考えられます。須弥壇の南側には床束を支えるような小さな礎石があり、柱筋の内側に位置することから、P13及び南側の床束には供物台があった可能性があります。調査時は南側の平坦面が崩れており、広庇部分が消失した可能性もありますが、階段状遺構も近接しているため、礼堂をもたない建物と考えられます。また、礎石建物北側の基壇縁石外に沿うように雨落ち溝を確認しました。礎石建物東・西側の軒の出は、礎石建物北側の軒の出と同程度と思われます。

②基壇・階段状遺構

建物の基壇は南側を除き、河原石を1列並べただけの縁石状の基壇です。東西の縁石の幅は約13.1mです。南側の平坦面が崩れているため、基壇上端が不明ですが、階段状遺構の東側には基壇南端の縁石があります。南北の縁石の幅が約13.1mであることから、基壇は方形であると考えられます。整地された基壇の南側の基盤層上で階段状遺構を確認しました。階段状遺構の耳石は、須弥壇東側の柱筋の延長部に位置し、耳石はほぼ基盤の傾斜に合わせて出土したことから、基壇南側の勾配は緩やかであった可能性が高いです。踏石が須弥壇西側の柱筋の延長部で途切れることから、階段状遺構は、須弥壇の幅に合わせて作られたと考えられます。

③地鎮・鎮壇

須弥壇中央の土坑（SK223）で八稜鏡（図2）が出土しました。この鏡は鏡面を上にし、やや南側（正面方向）に傾けた状態で出土しました。鏡背に楮紙が付着していることや鏡の下から靱殻が出土したことを踏まえると、鎮壇（寺社を建立する際、その土地の神々を鎮める祭事）に際して、土坑の底面に紙を敷き、五穀を埋めた行為が想定されます。また、鎮壇具の埋納は8世紀以降に行われますが、鏡を鎮壇具として埋納することや輪宝と槪若しくは独鈷が出土していないことから、鎮壇具の埋納方法は古い様相があると言えます。

（3）出土遺物について

①八稜鏡

鏡は、鏡の文様から瑞花双鳥八稜鏡と考えられます。材質も上質で錆が少なく、全国的に10cm前後のものが多く、直径15.4cmと非常に大形です。背面には八稜形の界圈の内区に鳳凰と瑞花唐草文を2個ずつ、鈕（つまみ）を中心に内向旋回させています。鈕座は花座で、円形の鈕孔をもちます。鳳凰の顔を内側に向けるという古い要素と、非円形界圈で瑞花文は枝茎が消え繁縷（華やかで美しい様子）になるという新しい要素の両方があります。時期は、基壇整地土から出土した土器の年代から10世紀後半頃と思われます。

②礎石建物及び周辺から出土した遺物

礎石建物及びその周辺から出土した遺物の分布を図3に、主な遺物を図4に示しました。礎石建物及びその周辺から螺髪（2・3）・塑像片（4）が出土しました。螺髪は須弥壇に近い位置で出土し、塑像片は須弥壇からは離れているものの、塑像片が出土したSK184は礎石建物と同じ10世紀後半であることから、螺髪と塑像片は同一の仏像であると考えられます。瓦は礎石建物北側の遺物包含層及び建物南西側のSK239で多く出土しました。丸瓦・平瓦など瓦の大半は、当遺跡で出土した10世紀のロクロ土師器と類似する白色の胎土で作られています。熨斗瓦（5）の製作技法は、7世紀後半以降に見られる飛騨地域の瓦造りの技法にも、8世紀後半以降の国分寺の瓦造りの技法にも見られないことから、礎石建物の造営に伴って10世紀後半頃に焼かれた瓦と考えられます。また、礎石建物周辺を中心に、寺に関わる遺物が出土しました。礎石建物周辺の遺物包含層から、在地のものと思われる多口瓶（6）が出土しました。礎石建物の基壇からタールが付着した土師器皿（7）が出土し、これは灯明具として仏堂内で夜の悔過（罪や過ちを悔い改めること）を修する際に使用したと考えられます。礎石建物の約32m西側のSK511から「寺」と墨書された土器（8）が出土し、寺の存在を伺うことができます。

3 まとめ

今回の調査では、8世紀後葉の仏堂と考えられる遺構は確認できていませんが、多口瓶やこの時期の遺構があることから、8世紀後葉に寺院が造営されたと考えられます。10世紀前半には、発掘区南西部に掘立柱建物（SB05・06・09）、10世紀後半になると仏堂と考えられる礎石建物（SB04）、掘立柱建物（SB07・08）が建てられました（図5）。なお、今回の発掘区で11世紀の遺物がほぼないことから、礎石建物（SB04）は短期間で廃絶しました。



※灰色の網掛け部分は
発掘区を示す

図1 日焼遺跡と周辺の遺跡
(「平成4年高山市市街図其一」をもとに作成)

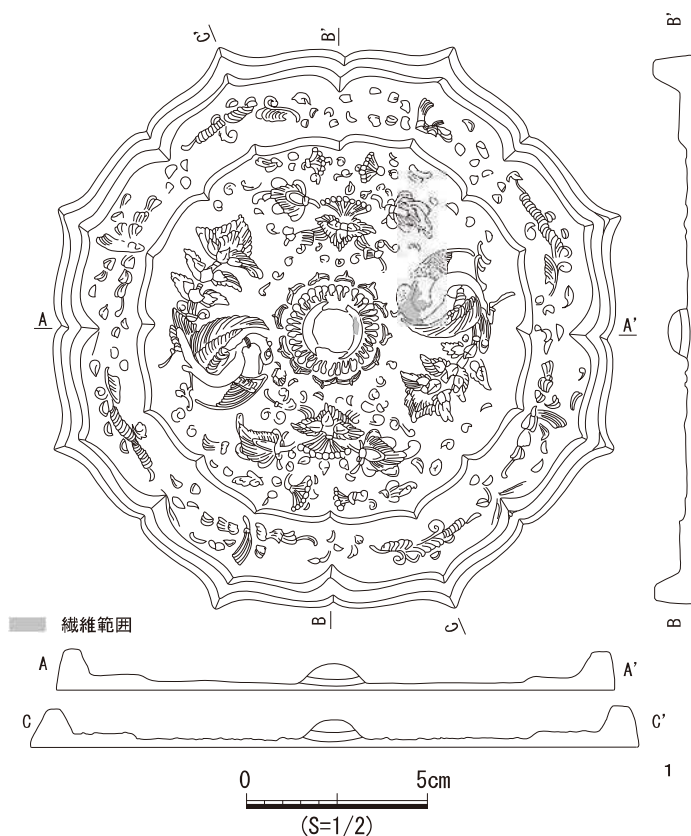


図2 瑞花双鳥八稜鏡実測図

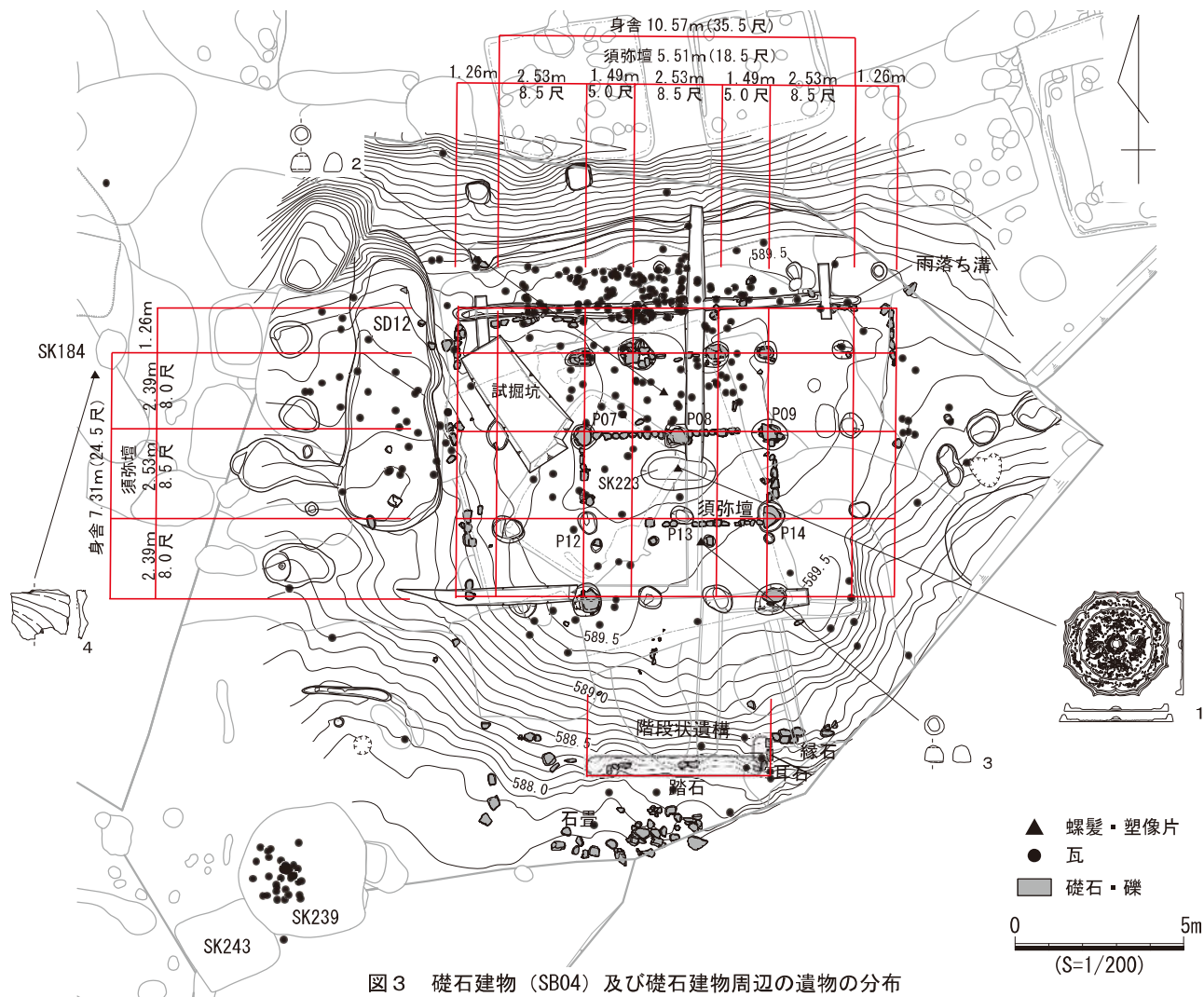


図3 礎石建物 (SB04) 及び礎石建物周辺の遺物の分布

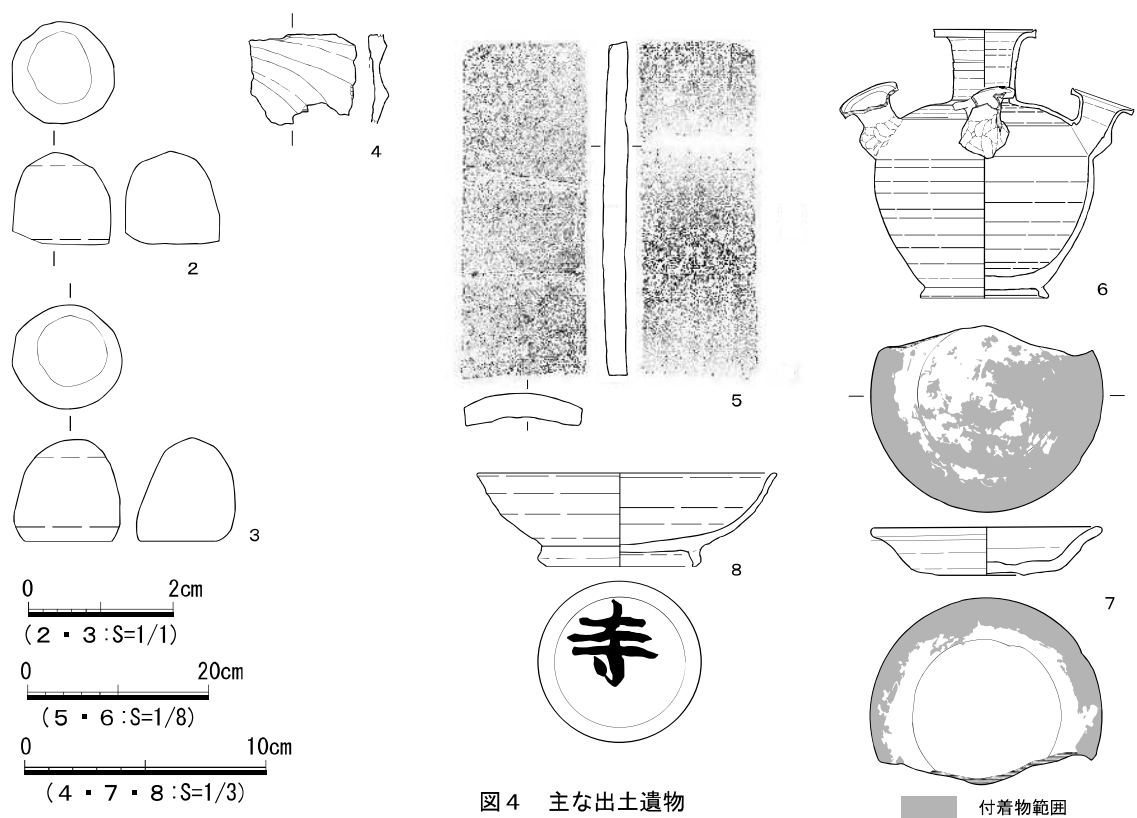


図4 主な出土遺物



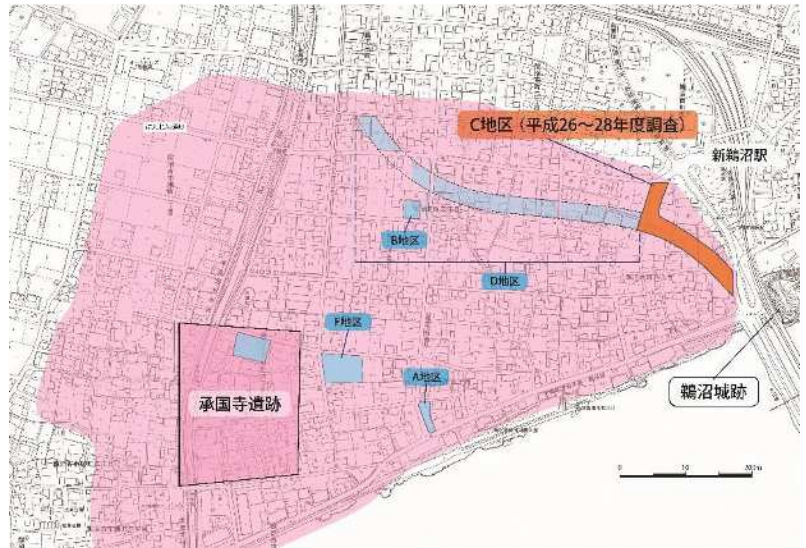
図5 礎石建物 (SB04) 周辺の主な遺構

鵜沼古市場遺跡 C 地区 発掘調査報告（14：05～14：45）

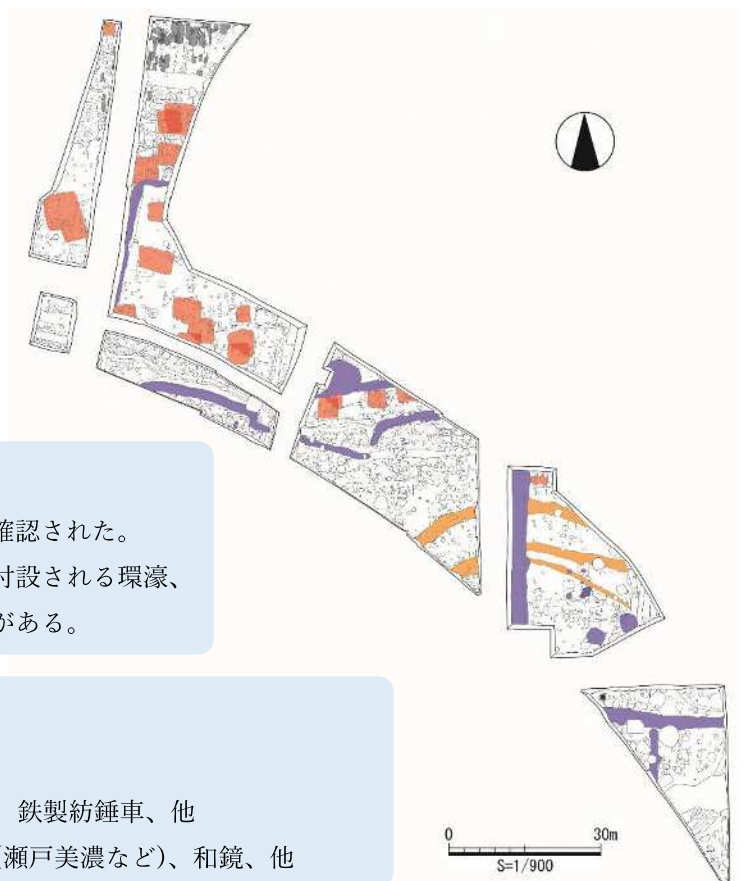
各務原市埋蔵文化財調査センター 三浦薫平

1. 鵜沼古市場遺跡の発掘調査

本遺跡は各務原市東部に位置し、愛知県との県境である木曽川が西流する。これまでの調査で、原始から近世、とくに古代・中世の遺物が主体的に確認されている。発掘調査では、古代の建物跡などが確認されており、広域的な集落が断続的に営まれたことが分かっている。近年は、県道バイパス建設工事に伴い、C地区（H26～28）、D地区（R2～）の調査が実施され、古代から中世に及ぶ集落の様相が明らかになってきた。



2. C 地区の調査成果



○弥生時代から戦国に及ぶ遺構群

C地区の調査では、複数の時代に及ぶ痕跡が確認された。とくに注目されるのは、弥生時代の集落に付設される環濠、古代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、中世の大塚がある。

○各時代の出土遺物

弥生時代 … 弥生土器、石鏃、石斧
 奈良平安時代 … 土師器、須恵器、土製品、鉄製紡錘車、他
 戦国時代 … かわらけ、山茶碗、中世陶器（瀬戸美濃など）、和鏡、他

3. 弥生時代

○環濠集落の確認

弥生時代の遺構として、弥生集落によく見られる環濠が検出された。環濠は二重に巡る SD1・2（弥生中期）、一重と推定される SD3（弥生後期）があり、出土遺物の型式編年によると形成時期が異なると考えられる。住居跡など人々の生活が分かる遺構は確認されなかったが、環濠の検出状況から集落のおおよその範囲を想定するに至った。

環濠からは弥生土器や石器が多数出土した。とくに弥生土器は甕形土器、壺形土器、高坏、大型製品などさまざまな器種が見られ、市内の弥生時代遺跡の中でも豊富な出土量であった。尾張地域からの搬入品と考えられるものもあり、河川を介した地域間交流があったと考えられる。



4. 奈良・平安時代

○8～9世紀を中心とする建物群

古代の遺構としては竪穴住居 36棟、掘立柱建物 2棟が検出された。住居は一辺 4～5m の同等の規模であり、均一的な住居群と認められる。出土遺物を見ると、帰属年代は主に 8～9世紀であり、住居内から出土したものが多くあった。そのほかに鉄製の紡錘車、刀子、斧や円面硯、墨書土器など希少なものも見られた。





○美濃須恵窯跡群（写真：天狗谷遺跡）

市域山間部に点在する美濃須恵窯は、7世紀に須恵器生産を開始、8世紀初頭には最盛期を迎えたとされる。

○古代鵜沼の繁栄

本遺跡の竪穴住居群を見ていくと、8世紀前半期に建物跡が増加している。これは市域の他の集落遺跡も同様の傾向にあり、当該期に市域で人口増加があったと見ることができる。こうした現象の背景のひとつとして、美濃須恵窯の操業に着目したい。

須恵器生産は古代各務郡の主要産業であり、専門的な工人、運搬する人員など多大な労働力が必要であったことが想像できる。8世紀初頭、須恵器生産・流通が本格化する時期に集落の形成・繁栄があったのではないかと考える。鵜沼に栄えた古代集落の変遷は、須恵器生産の盛行と連動するものと想定したい。

5. 戦国時代

○鵜沼城下の痕跡

中世の注目される遺構として、鵜沼城の築城の壕と考えられる溝状遺構が検出された。溝の幅は約3.2m、深さは約1～1.6mを測り、大規模であることが明らかになった。溝の位置や規模より、鵜沼城を取り囲む壕の一部ではないかと推察される。大壕に隣接して検出された井戸遺構及びその周辺からは、天目茶碗、青磁などの陶器類、古銭が出土している。

一方で戦国時代以前、美濃国守護・土岐氏の時代とされる遺物として、かわらけや和鏡がある。とくにかわらけは多数出土しており、承国寺跡で出土したものと同型と見られるものもある。



○鵜沼城主大沢氏

鵜沼城はこれまでに発掘調査はされておらず、現況は明確には分かっていない。『美濃雑事記』の文献史料によると、城主とされる「大沢次郎佐衛門」、「宇留摩（間）城」という表記が確認される。信長の東美濃攻略で制圧された以降の鵜沼城の動向については、明らかになっていない。今後も、鵜沼城やその周辺の発掘調査成果に期待したい。



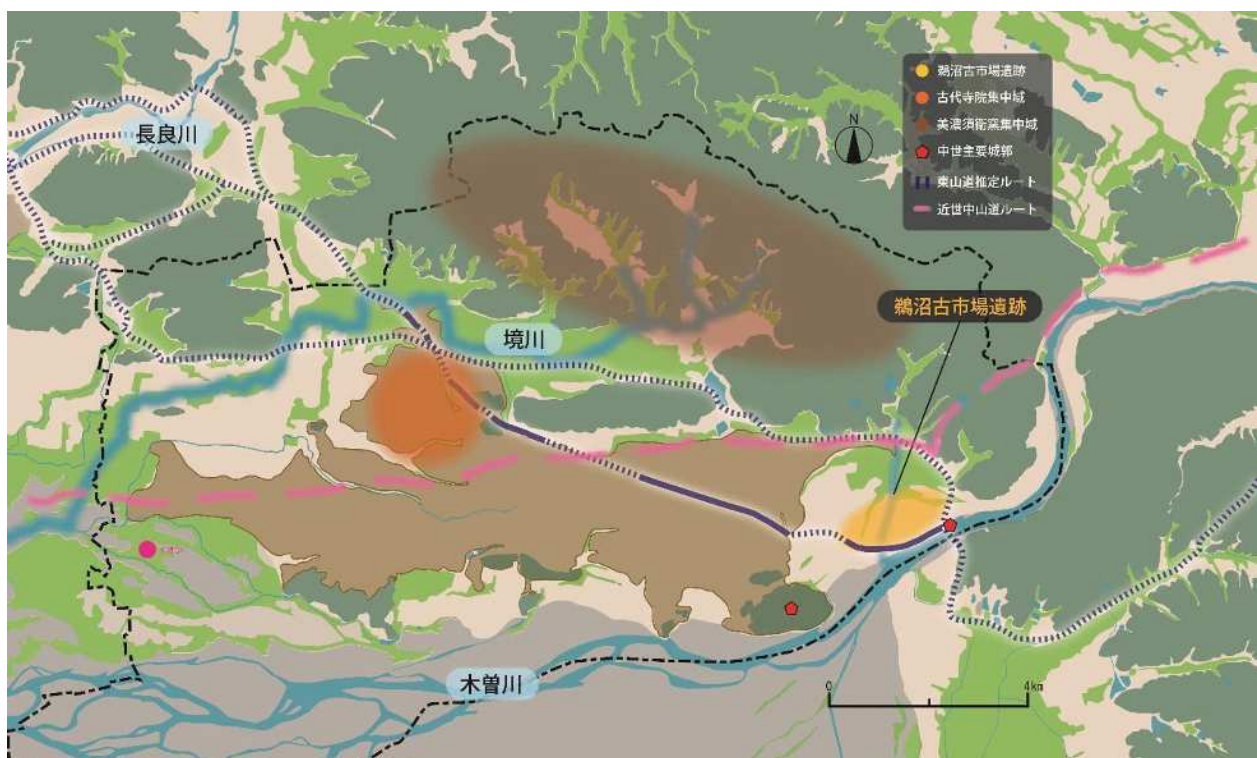
6. 鵜沼地域に栄えた集落

○交通の要衝地

弥生時代から集落があるように、古来より人やモノが行き交う要衝であったと考えられる。とくに、鵜沼は木曽川の渡河地点があったと推定され、河川を超えた往来が比較的容易であったと考えられる。また、古代東山道、近世中山道といった官道も通る地であり、古来より中央から東日本へ向かう街道であった。このような地勢が各時代の多種多様な遺物が出土する要因のひとつと言えるだろう。

○政治・文化の拠点

古代においては坊の塚古墳をはじめ、数多くの古墳が築造されており、中世においては美濃国守護土岐氏、鵜沼城主大沢氏といった地域の権力者が鵜沼を拠点としている。鵜沼地域が各時代において繁栄した背景には、流通・交通の掌握、最前線の防衛拠点など外交・自衛を見据えた動向があったことが示唆されるだろう。



国指定史跡 東氏館跡及び篠脇城跡について

郡上市教育委員会社会教育課

1 はじめに

- ・東氏館跡と篠脇城跡は、郡上市大和町牧に所在し、長良川の支流栗巣川の河岸段丘上とその背後にそびえ立つ篠脇山(標高約 486m)に立地。
- ・国史跡指定を目指した総合調査を令和元年度より実施。令和 6 年 10 月 11 日に国史跡に指定。

2. 東氏について

- ・鎌倉時代から戦国時代にかけて、美濃国北部の山田庄を治めた領主。
- ・出自は、鎌倉幕府御家人千葉氏の一族。下総国東庄を領したことから、「東」と名乗る。
- ・和歌に秀でて、歴代当主の和歌が勅撰和歌集に入集。特に東常縁は、連歌師宗祇に古今伝授を行ったことから、「古今伝授の祖」とされる。
- ・承久の乱の軍功により、東氏は山田庄を与えられ、移り住む。当初、阿千葉城（郡上市大和町剣）を拠点とする。その後、大和町牧地内に拠点を移す。
- ・室町時代には、幕府の奉公衆として在京。
- ・応仁 2 年（1468）、斎藤妙椿が郡上を攻める。この知らせを聞いた東常縁は、斎藤妙椿と和歌のやり取りを行い、東氏に本領が還されたとされる（『鎌倉大草紙』）。
- ・天文 9 年（1540）、朝倉氏が篠脇城に攻め込む（『莊厳講記録』『長滝寺文書』）。東常慶は、篠脇城から赤谷山城へ移る。
- ・永禄 2 年（1559）、遠藤氏との争いに敗れ、赤谷山城が落城し、東氏は滅亡する。

3. 発掘調査資料の再整理で判明した東氏館跡の様相

- ・東氏館跡では、これまでに 3 次にわたる発掘調査を実施。発掘調査の結果、庭園跡、礎石・掘立柱建物跡、帯状石列遺構、溝跡などを確認。多種多様な遺物が出土。
- ・良好な状態で発見された庭園跡は、昭和 62 年に国名勝「東氏館跡庭園」に指定。
- ・総合調査では、過去の発掘調査資料の再整理を実施。調査の結果、炭化物を含む堆積土と被熱した陶磁器から、東氏館跡では 2 時期の変遷が判明。

第 1 期…12 世紀中葉頃に館となる場所に何らかの施設が造られ、15 世紀前葉頃に火災に遭い、廃絶した。

第 2 期…15 世紀中葉頃に庭園を持つ中世武家館として整備され、16 世紀前葉頃に火災に遭い、廃絶した。

- ・過去の発掘調査で確認されたの遺構のほとんどは、第 2 期に帰属。遺構の切り合い関係や主軸

方位のまとまりが認められるため、複数時期にわたる可能性がある。

・第2期の空間構成（第1図）

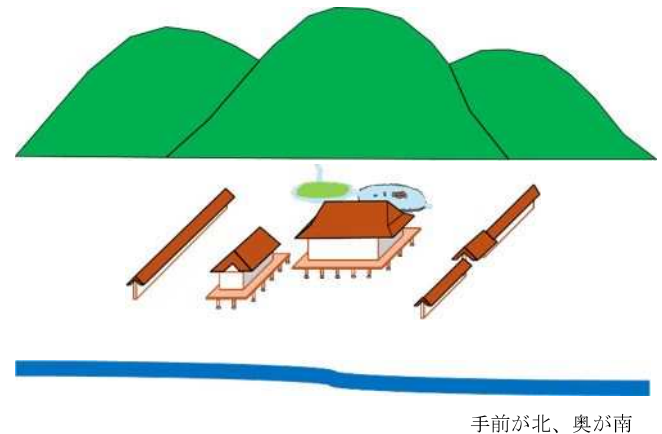
西側を、帯状石列遺構を基礎とする堀で囲い、西側堀の1か所が開口し、敷地内に入り。

南側は、溝により区画され、篠脇山を背にした。

敷地の南西部に中島を有する不正楕円形の池が作られ、庭園の南側には遮蔽施設とされる柱穴列を検出。

庭園の北側には沓脱石を伴う礎石建物が配された。この建物は庭園の鑑賞や饗宴の場と推測。

庭園の東側では溝が巡り、礎石・掘立柱建物やカマド関連遺構を確認。これらの建物は普段の生活に関する場と推測。



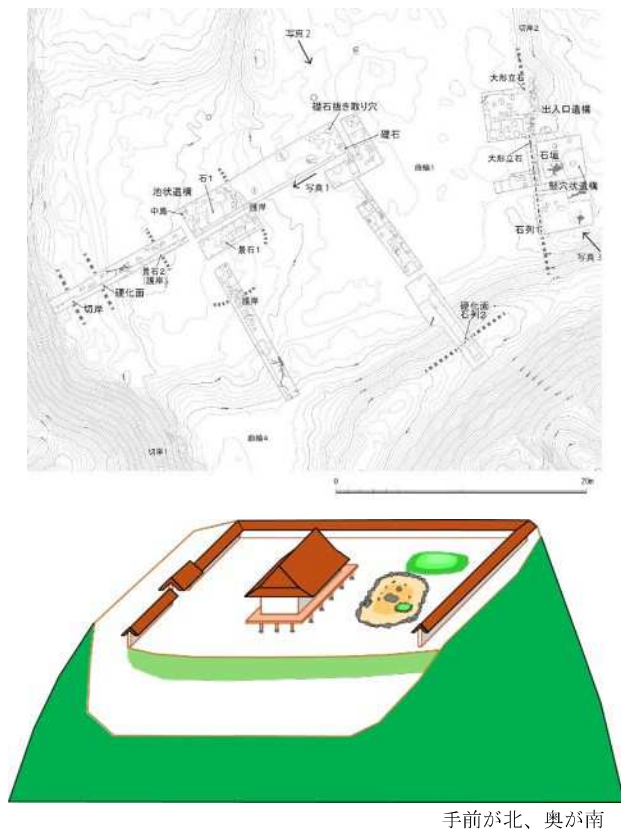
第1図 東氏館第2期全体図（左）、東氏館第2期イメージ図（右）

4. 発掘調査で判明した篠脇城跡の様相

- ・総合調査では、曲輪での遺構・遺物の有無や築造年代の把握、東氏館跡との関係を明らかにするため、発掘調査を実施。その結果、曲輪で確認した層位や出土遺物の様相から、篠脇城跡では3時期の変遷が判明。

第1期…16世紀前葉頃から中葉頃にかけての遺構を確認（第2図）。

- ・曲輪の中央部分で礎石を検出。礎石建物の存在が判明。
- ・切岸では大形立石を配した出入口遺構、石垣などを確認。大形立石に隣接する50cm四方の石や扁平な石の存在から、出入口遺構は東に開口した出入口で、門や石段があった可能性。
- ・曲輪の西部分では池状遺構を確認。川原石や景石などによって護岸を作り、池底は水が地面に浸透しないように鋼土を造成するとともに大小様々な景石を配置。また、石1や中島など、池に関する施設がある。
- ・西、南、東の3箇所では硬化面及び石列を検出。構築物（堀）の基礎と推測。



手前が北、奥が南

第2図 篠脇城第1期遺構分布図（左上）

篠脇城第1期イメージ図（左下）



写真1 池状遺構



写真2 礎石



写真3 出入口遺構・石垣

第2期…16世紀中葉頃以降の土坑、ピット、炭化物を含んだ遺構、切岸上部に築かれた石垣などの遺構を確認(第3図左上)。

- ・前段階で機能した池状遺構は、護岸や池底の礫が拭き取られ、土砂により埋め立てる。
- ・出入口遺構は石臼や土砂で埋められ、閉塞。
- ・土塁では前段階で機能した石列に造成土を盛り、土塁の芯部とし、さらに切岸側から別の造成土を盛る工程で構築。

第3期…第2期から間もない時期に造成土で盛った地面に方形状に区画する溝、ピットを確認(第3図左下)

- ・出土遺物は、各遺構面を構成する造成土から、天目茶碗・皿類・播鉢・壺類の瀬戸美濃陶器、土師器皿、常滑産陶器の壺・甕、青磁の碗・稜花皿・香炉、白磁の碗、青白磁梅瓶、染付碗などの貿易陶磁、茶臼や基石の石製品、鉄製品が出土。

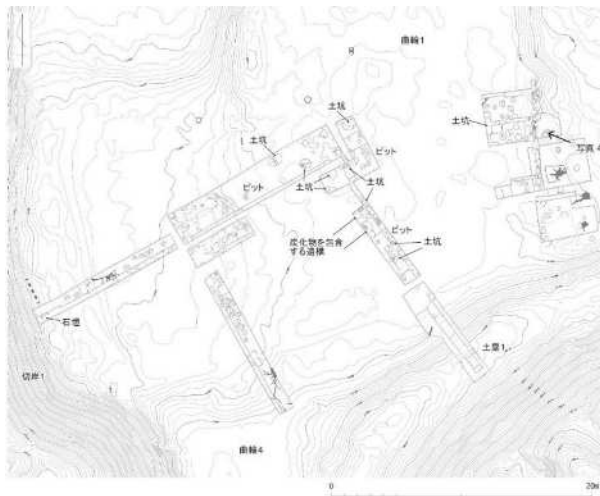


写真4 出入口遺構の閉塞状況



写真5 土塁1近景

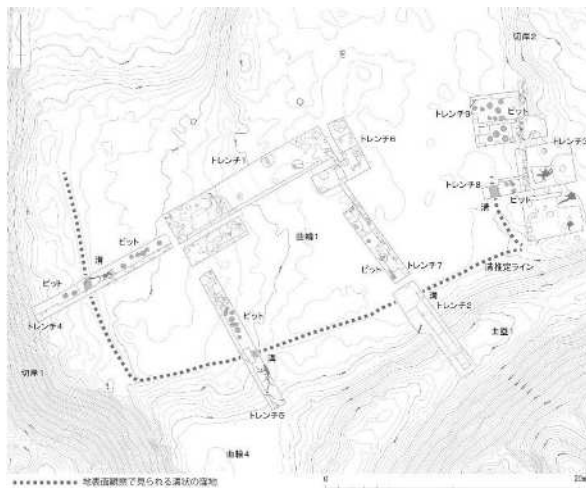


写真6 ピット・溝検出状況

第3図 篠脇城第2の遺構分布図（左上）、篠脇城第3期の遺構分布図（左下）

5. まとめ—東氏館跡と篠脇城跡の変遷—

- ・東氏館跡と篠脇城跡は、Ⅰ～Ⅳ期の変遷としてまとめることができる（第1表）。
- ・東氏は、15世紀中葉頃に山麓に庭園のある館を構え、応仁・文明の乱後の16世紀初頭頃に山上に池のある館を構え、山麓の館から移り住んだ（Ⅱ期）。

- ・16世紀中葉頃に山田庄を治めた城主は、山上の館を廃し、軍事施設を備えた山城に改修し、利用し続けた（Ⅲ期・Ⅳ期）。
- 東氏館跡及び篠脇城跡は、美濃国北部の情勢に応じて、この地域を治めた領主の城館の変遷が分かる重要な遺跡として評価。

第1表 東氏館跡及び篠脇城跡の変遷表

段階	時期	東氏館跡	篠脇城跡
Ⅰ期	人々が後に山麓の館となる場所を利用した段階 12世紀中葉～15世紀前葉	1期	
Ⅱ期	山麓の館が成立した段階 15世紀中葉～末葉	2期	ブレ1期
Ⅲ期	山上の館が成立した段階 16世紀初頭～中葉		1期
Ⅳ期	廃絶した山上の館が山城に改修・利用された段階 16世紀中葉～		2期 3期

令和6年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査実施一覧

通番	所在地	遺跡名	時代	種類	調査主体
1	岐阜市	岐阜城跡	中世	城館跡	岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課
2	岐阜市	芥見町屋遺跡	縄文～近世	散布地・集落跡・生産遺跡・道路	岐阜県文化財保護センター
3	高山市	広瀬城跡	中世	城館跡	高山市教育委員会文化財課
4	関市	松原遺跡	旧石器～中世	集落跡・その他の墓	関市文化財保護センター
5	中津川市	中山道（落合宿本陣）	中世・近世	その他	中津川市文化スポーツ部文化振興課
6	美濃市	改田遺跡	古墳～中世	散布地	岐阜県文化財保護センター
7	恵那市	明知城跡	中世	城館跡	恵那市教育委員会文化課
8	土岐市	御殿窯跡	近世	生産遺跡	（公財）土岐市文化振興事業団
9	各務原市	鵜沼古市場遺跡	奈良～近世	集落跡	各務原市教育委員会文化財課
10	可児市	美濃金山城跡	中世	城館跡	可児市経済交流部歴史資産課
11	飛騨市	殿坂口遺跡	縄文～中世	散布地	飛騨市教育委員会文化振興課
12	本巣市	船来山古墳群	古墳	古墳	本巣市教育委員会社会教育課
13	垂井町	菩提山城跡	中世	城館跡	垂井町教育委員会生涯学習課
14	関ヶ原町	不破関跡	古代	官衙跡	名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室
15	大野町	野古墳群	古墳	古墳	大野町教育委員会生涯学習課
16	大野町	上磯古墳群	古墳	古墳	大野町教育委員会生涯学習課

メ モ



©岐阜県